



六花

3

2020

りっかはいくかい

山田六甲

春火鉢

紳

てのひらによろけてゐたる冬の蜘蛛
仏蘭西はクレープまつり冴返る
いつの間に手相変りぬ二月尽
城垣の膨れてきたる春日かな
オリオンに落ち行きさうぞ冴返る
草萌や令和天皇誕生日
春風の水陽炎や西の対
立春や日岡の山は亥お巳い籠
凭れたる城垣の根のあたたかし
春ストーヴけふは火入をしてをらず
風強し城の高さに春の鳶
籠沼の隅をひろびろ残鴨
春日さす坂東吹雪は万年青の名

冬覆盆子一人だけみて戻りけり
階を下りるときには春寒き
姉様に踏みつぶされし紅椿
麦青む果は雲なき播磨富士
料峭や東ノ丸に茶湯の井戸
龍の吐く手の切れさうな春の水
君は立ちぼくは座れる雨水かな
鯉のふる領巾に溺れし春日かな
立春の堆肥濠々牛がをり
馬がをり音温かき飼葉桶
立春の日が傾ける播磨富士
爪白し日岡の巫女の春火鉢
鈴の音を立ててもならず亥巳籠

好古園のこひその二
亥巳籠る岡の手つなぎ

笹村

着ぶくれて

雪嶺抄

山茶花の影はみだして散りにけり
ゆるやかな日の当たりたる朱戀かな
海光に収まりきらぬ鴨の群
散り紅葉のせたる風の華やげり
落葉松のしぐるる音を聞いてをり
踏み入りしよべのしぐれの朽葉かな
冬の鯉浅きところに打ちあへり
真ん中にドラえもん布団干されあり
行く年や病む娘の月日わが月日
着ぶくれて会うてはならぬ人に会ひ

志方 章子

金木屋

蟋蟀抄

冬晴れや明治天皇行在所
石路の花客出迎へしとき一花
金木屋三時のお茶は戸を閉めて
あの赤が眼裏去らぬ万年青の実
シヤンソンを口ずさみつつ小芋剥く
枯葉散る人生百年の途中
菊衣まとひし姫に虻止まる
九十の義姉は健やか日短し
木屋の花を散らせて雨あがる
病室の窓をはづれぬ冬の月

はまなす抄 一葉忌 升田ヤス子

枯芒山の稜線糺しけり
地蔵に栗供へここより法華山
落葉雨浴びたくて来し櫛坂
ゴム紐を取り替へてゐる一葉忌
湯豆腐や夫の温顔さらなるに
ロープウェイまでの石段草紅葉
紅葉且つ散る一對の六道絵
綿虫やかこちてゐたる不整脈
眼の神の木の実の水を掬ひけり
新日記プリズム色の表紙かな

藤生不二男

寒禽の行方知らずの空のあり
遠田みな隠るるほどにしぐれけり
舳先より一舟かすむ時雨かな
湿りたるけむりの匂ふ落葉焚
萩枯れて束ねし縄のゆるびけり
鳴きこゑの一つ一つや鴨の群れ
暮れゆける水にとどまる落葉かな
風花や檻のけものの遠目して
こゝろもち遠まなざしをして冬木
冬銀河寄り道もして行きなはれ

山稜抄 冬木

住田千代子

善野 行

湿りたる匂ひのなかの紅葉山
牛小屋の丸太に灯る烏瓜
その赤き美男葛に惹かれけり
根つめて剥がしをりけり牛膝
触るる手の何とやはらか煙茸
裏口に炎える紅葉を拾ひけり
万両の苔に一粒しづみけり
鱒網を干して舟屋の空広ぐ

へうへうと赤シャツのゆく枯野かな
着ぶくれの蕪村もゐたり伊根の宿
黄昏は何さびしうて柿をむく
涸滝に諸鳥の声零れけり
夕茜濃き晩秋の一つ星
黄落や登校生の足照らし
土塊のやうに落ち来し寒雀
寒き夜や熱と光でありし人

悼・中村哲氏

永田万年青

谷口 一献

紅葉山背負ひて伊根の舟屋かな
新元号馴染みてきたる年の暮
ルミナリエ老いも若きも二人かな
歳末の静かな居場所見つけたり
平成の賀状見返し賀状書く
筆文字にペン字加へて賀状書く
住所録消しつつ書きし賀状かな
払ひたる木椅子の银杏落葉かな

熱爛を注ぐ手に燃ゆるネイルかな
誤嚥して爛酒撒き散らかしてをり
熱爛や落ちる涙と冷や汗と
風邪癒えて酒の美味さの戻りけり
気持ちはいつも涙に遅れ春を待つ
涙止むまで冬紅葉みてればいい
二十世紀の遺物となりし煤払
日脚伸ぶ妻のスマホが鳴っている

出口 誠

田尻 勝子

くちびるにセロファンテープ冬の夜
耳鳴りの医院で過ごすクリスマス
プレゼント「考えとくわ」クリスマス
クリスマス犬の首輪の光りけり
首輪にもイルミネーションクリスマス
いらいらとする理由なきクリスマス
冬の日や家より外がぬくいとは
太陽が雲にかくれていと寒し

鴨の陣たちまち鯉の餌に走る
オーロラのダンスに見入る雪達磨
一瞬に夕日は海に年の暮
すすすすき居場所はそこだ風のまゝ
耳朶透かし冬の太陽燃えてをり
地を圧して大根半身脱ぎにけり
臘梅の咲き初めてゐる河畔かな
クリスマス海に光のさんざめく

夢風撰巻頭

耳鳴りの医院で過ごすクリスマス 出口 誠

くちびるにセロファンテープ冬の夜
耳鳴りの医院で過ごすクリスマス
プレゼント「考えとくわ」クリスマス
クリスマス犬の首輪の光りけり
首輪にもイルミネーションクリスマス
いらいらとする理由なきクリスマス
冬の日や家より外がぬくいとは
太陽が雲にかくれていと寒し

みみなりのいいんですぐすくりすます でぐちまこと

相当のストレスに襲われたのである。耳鳴りがひどくてついに医院へ駆け込んだ。医者は気軽に診察してくれる。今日はクリスマスだった。それを診てくれる医者もクリスマスどころではない。しかし病院ではなく医院なのだから近所のかかりつけであろう。医師も心得ているから、出口さんしばらく診察ベッドで休んでいて下さいと言われてベッドへ。点滴を受けていると耳鳴りも治まってきたと思われる。患者も医師もクリスマスどころではないのである。昔、個人的にお世話になっていたお医者さんが「息子を医者にしないのは、寝ぼける癖があるからだ」と言われていた。急患に対応できないおそれがある」と判断されたのだろう。冷静なお医者さんだった。

雪樹集

平居 滢子

君とゆく万葉の森紅葉濃し
からまりて魂とびぬ蒲の絮
紅葉山断ちて光れる明神滝
靴紐を結び直さば背に紅葉
鍵かかる山頂小屋や末枯るる
雨すぐに雪に変わる下山かな

廣畑 育子

招福の二股大根乳房めく
柵や昔たばこ屋タイル窓
冬に入る家の電話の鳴らぬまま
冬立つや鳥居は海へ一直線
枯葉鳴る地団駄の子に訳のあり
桜落葉に花の匂ひのしてをりぬ

江見 巖

大内 幸子

巨大船停まりつづける年の暮
新蕎麦やレトロの時計昼を打つ
大根稲架土を落として白くなる
足胼胝を両方にもつ針供養
裏畑や人参の葉を置き忘る
葉牡丹を置きて玄関明るうす

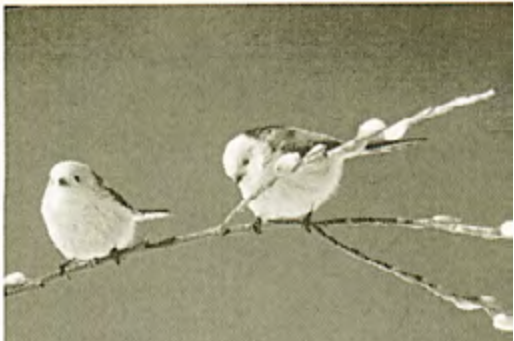
師走とは思へぬ速さ年毎に
惜しまれて会ふ事もなく秋は逝く
書き取りの頁に細き木の葉髪
電柱の陰に寄り添ふ冬堇
血圧を計り直して着膨れる
今年の年も冬至南瓜をいところ煮に

延川五十昭

延川 笙子

袖引いてその気あらざる姫始め 速達で過ぎゆく令和去年今年
亡き友の呉れし賀状や除夜の鐘 煤逃げや江戸の老舗の身売り宿
花歌留多小木の港の盃舟 灯笼に藁囲ひする年の暮
銀河見ずおけさの柿を齧りけり 旧友の行方は知れず年賀状
銀屏の白鶴浮かぶ冬の闇 松踊る垂水漁港の冬景色
時雨るるや声は猿の親不知 あの世にも知人は多し初笑

蛍雪譚 山田六甲



枯芒山の稜線糺しけり

升田ヤス子

ところをとらえた大きい景色の句である。

ススキが枯れると白くなって日に輝き、山の稜線（かたち）がはっきり際立って見えるとしたのである。それをこだわりの文字を用いて「糺す」とした。「糺す」とは「正す」と同語源で物事の是非を明らかにする。罪過の有無を追及する。「事件の真相を―す」「事の是非を―す」などと使う。読者はどうしても難しい言葉の方に引きずられて作者の言いたいことを素直に受け止められないことがあるので、普通に「正す」と使えばいいのと思う。句の意味はススキが枯れないうちには、稜線がはっきりしなかったが、枯れて白くなると秋日に輝いてススキの白い輝きが稜線を際立たせるとい

藤生不二男

暮れゆける水にとどまる落葉かな

鑑賞過多かもしれないが、落ち葉が夕暮れの水に浮かんでいるのか沈んでいるのか鑑賞に惑うが、あれこれ考えたら、流れる水に落ち葉が沈んでいるのだろう。

落ち葉の流れずそこにどどまっている一抔の寂しさ哀れさに目を遣っているのだと思う。か、または落ち葉が水に浮かんで流れず、その場で暮れているのだろうか？そこまであれこれややこしく鑑賞しないで、夕暮れの水に落ち葉があるという光景だろう。か？

六花集

石川 憲二

朝日差す鈍色瓦冬の霧

被雷せし樅の木ありて冬至過ぐ

苔むして燈籠青し寺の暮

寒風や酔ひし主宰の黒ネクタイ

小晦日流したきこと雨になる

磯野青之里

菊谷 潔

冬木立落葉の山を前にして

秋風が木枯しになる夜のしじま

年は瀬を見せて流れの速さかな

食うて寝て糞するうちに年の暮

掛軸のふるびもかざる老いの春

ベンチコート脱ぎて走者の面構へ

しぐるるや如意ヶ岳のち浜大津

日光を撓めむがごと北吹けり

冬ざれや痩せたる畦の道普請

去年今年正反合の弁証法